

学生による授業評価の経時的な変化

工学部FD委員会委員長
逢坂昭治
工学部・機械工学科・教授（機械システム講座）

化学応用工学科

平成11、12年度の後期の講義科目（昼間コース、22科目）を対象として調べた。教師に対する6項目の評価を平均して学生の教師に対する評価（満点＝5）とした。11年度の評価の最高値は4・24、最低値は2・19、平均値は3・19であった。一方、12年度においてはこれらはそれぞれ、4・35、2・32、3・06となった。各科目の評価値には大きな変化はないものの15科目が低くなり、高くなったのは7科目に過ぎなかった。以上の結果は学生の評価が12年度においてより厳しくなっていることを示唆しており、継続的な授業評価の実施とその分析が重要と考えられる。

電気電子工学科

毎学期末に実施した授業評価アンケートは集計し、各アンケート項目別の全科目の平均値とともに授業担当教官ヘフィードバックしている。昨年度と一昨年度の集計結果を比較すると、教官の授業に対する熱意だけでなく、話し方や板書などの教育技術にも平均以上の評価を

れた。これは厳しい社会情勢を反映して、学生の学習意欲が上昇しているためと解釈される。授業方法に関する設問では、「視覚的情報伝達の正確さ」が0・12ポイントほど増加し、「総合評価」もわずかながら上昇していた。OHP等授業の材料の改良など、FD活動の成果が徐々に現れつつあるものと推察される。

機械工学科

平成11年度の後期から、13年度前期を除き、実施して来ており、アンケートの集計結果は担当教官に学科全体の分布とともに報告している。これまでの集計結果から、学生の自分自身に対する評価が0・2ほど上がっており、特に、欠席数の減少と予習・復習時間の増加に改良が見られた。また、教師に対する評価においても0・1ほど上昇した。学生の教師に対する評価はしだいに信頼性が高くなっていることから、このことは教官自身の授業改善に対する努力の結果が評価されたものと考えられる。このように、アンケートの実施は、学生および教官の双方に、授業の取り組みに対して良好な成果を挙げている。

工学部の学生による授業評価アンケートは平成11年度の後期に始まり、その後は学科によって多少異なるが、ほぼ毎学期ごとに継続して実施されて来ている。調査は、各科目担当教官が授業の最後2週間以内のある時期に、授業時間中にアンケート用紙を配布し、回収する形で行われている。回収されたアンケート用紙は読みとり機によって集計し、すべての科目の集計が終った段階で、各担当教官に集計結果が知らされている。設問内容は、これまで2回変更したが、いずれも「授業内容・方法」と「学生自身の取り組み状況」に関する質問で、5段階評価である。

各学科の担当者によるこれまでのアンケート集計結果とその評価は次のとおりである。

建設工学科

平成12年度、13年度を対象に、15以上の有効回答が得られた27の昼間コース科目について、評価の平均値を比較した。学生による自己評価の平均値は微増（0・1～0・3ポイント）しており、特に「自習時間」には最大の増加が見ら

与える学生が増加してきており、学生の授業への欠席が減少するなど学生も授業に積極的に取り組む傾向が見られた。一方、実験・演習科目以外1回の授業に対してほとんど自宅で学習しないと答える学生が多く、学生の積極的な学習に対する意欲を増加させる教官の工夫が必要ないように思われる。

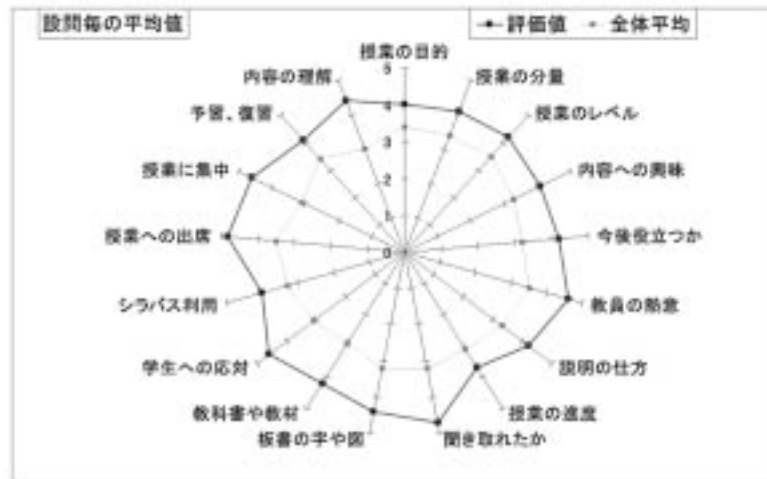
知能情報工学科

知能情報工学科では2年前に一度実施しただけで、経時的な変化は明らかではないが、授業評価の実施に伴って教官側に教育方法改善への意識が浸透したのは確かである。いづれ授業評価が再開されるであろうという思いがあり、そのことが一つの刺激となっており、よりよい授業の実現への意欲が増進され、その結果として、教育方法のより一層の改善が押し進められると思われる。

生物工学科

学生の授業評価の経時的変化を見ると、学生の到達度の満足度は年々増加しており、授業評価の効果がでてきている。また学生の積極的参加を求める意見が多いので、グループ討論、発表を組み込んだ授業が多くなった。また、講義のない9月には学内インターンシッププログラムを設けた結果、年々、学生が積極的学修態度に変わって来つつある。学年の進行とともに、授業を選択する理由も単位が取りやすいからではなく、大学院進学等将来を考えての選択にな

ってきている。ただし、学習時間があまり増加していないのが残念だ。今後、学習の動機づけが、さらに重要であると思われる。



授業アンケートの評価値とレーダーチャート

光応用工学科

平成11年度後期より12年度及び13年度にわたり、各科目の授業評価(5段階評価)の推移を調べた。そのなかで、「教師の熱意」と「総合評価」に注目すると、全科目の平均値はほぼ横ばいであり、点数で見ると、進歩がみられ

なかった。一部の若手教官による授業で年毎に評価が上昇しているものがあつたが、大部分の授業では評価の高い授業は毎年高い評価を受け、その逆もしかりであつた。

これらの結果から、概して、教官の授業に対する熱意だけでなく、話し方や板書などの教育技術にも平均以上の評価を与える学生が増加してきており、教官の授業改善に対する努力が実を結んでいることが伺える。一方、学生自身においても欠席数の減少と予習・復習時間の増加に改良が見られ、授業に積極的に取り組む姿勢が強くなってきている。このように、アンケートの実施は学生および教官の双方に授業の取り組みに対して良好な成果を挙げているが、まだ満足できるまでには至っておらず、今後もこれを継続することによってより一層の授業改善に努める必要がある。